

コメント・質疑応答

中村 アジア学科の中村と申します。私の専門は中国近現代史で、主に20世紀中国の政治史を研究しています。今日のお二人のご報告に対して、正直なところ門外漢なのでうまくコメントができない状況にありますが、お二人のお話をうかがって、共通しているところと違ってるところがあったと感じました。

力点は違いますが、私の理解した限りでは、お二人に共通していたことは「内なる中華」の存在です。例えば、鳥井先生のタイトルには「小中華から半開へ」と付されているように、日本の蘭学者には「内なる中国」というものがあって、漢学・漢文がその一つの力になっていた、ということでした。他方、蔡先生のご報告も、確かに清代の中国は孔子の伝統を受け継ぐ漢族から異民族（満洲族）へと政権を移行させたけれども、それでもやはり漢文による交流が残り続け、鳥井先生がおっしゃったような意味での「内なる中国」が確固として存在していたことを証明されました。

しかし、ここで同時に考えなければならないことは、日本のアジア認識の変化という問題です。もう一度鳥井先生の報告タイトルに戻りたいのですが、近世日本が「半開」へという状況に移り始めていた時期に、日本から今までとは違ったメッセージが蔡先生がおっしゃられるような形で出されていたとするならば、恐らくその背後で日本のアジア認識には変化があったはずです。これは今日のセミナーのタイトルとも密接にかかわる問題ですので、この点についてうかがっていきたいと思います。

ただ、それをいきなり切り出してしまっただけは脈略を掴みにくくなってしまいますので、私は中国史の立場からまず事実を整理し、その上でこの問いに関連する問題群をお二人に投げかけてみたいと思います。

まず、事実の確認です。今日の鳥井先生のご報告にもありましたが、アジアという概念はアジアで生まれた概念ではありません。これはヨーロッパ発の概念で、マテオリッチの新しい地理認識によって生み出されたものです。つまり、アジアという概念は、16世紀から17世紀の明清時代にヨーロッパから持ち込まれたこととなります。ただし、ここで注意しておくべきことは、このアジアという概念が中国ではヨーロッパ流のアジア概念としてそのまま受容されたわけではない、ということです。皆さんもよくご存知のとおり、当時の中国では朝貢体制・冊封体制がその後も維持され、近代ヨーロッパとは異質な世界観が残り続けました。

こうした状況下において事実をより複雑にさせるのが、当時の日本の存在です。日本は16世紀の終わりに日明貿易を停止し、中国を中心とする朝貢体制から離脱していきました。しかし、いま中国研究者が指摘していることは、確かに日本は朝貢体制から離脱していったけれども、やはり内面においては中国からすぐに離れたわけではない、つまり、中国文化は相変わらず清く正しく美しいものであり、漢文や朱子学

イデオロギーというものは賛美されてしかるべきだと内面で思い続けていた、ということ。実際、日本は朝貢体制から離脱しましたが、漢文や朱子学の素養は依然として重んじられていました。だからこそ、例えば江戸時代末期から明治時代初期にかけて羅心という人が中国から日本を訪問した際に、日本は礼をもって歓待したわけ。また、明治時代の教育勅語にも儒教的な道徳観が反映されていました。こうした中国中心の世界観は直ぐには変化しなかった、ということです。

そうなってくると、ここで蔡先生に質問です。仮にこのような理解が正しかった場合、今日ご報告くださったような日本から中国への漢文学の発信という行為は、日本の独自性を打ち出す、あるいは中国の権威が低下してその裏返しとして日本の国威を発揚するという意味で出されたというよりは、むしろ、同じ漢文のルートを私たち日本も保持し続けていることをアピールするためにおこなった、とは解釈できないでしょうか。つまり、清朝は満洲族の王朝であったけれども、日本が中国文化を賛美し続けていたからこそ、こういう行為がおこなわれていたのではないか、ということです。この点についてどうお考えでしょうか。

次に2つ目の質問です。

しかし、そうはいても、蔡先生がレジュメ2ページでご指摘されたように、日本から中国への漢文学の発信という行為は「最初の『意図的な』中国への環流」という可能性も排除しきれません。もしそうだとすれば、こうした「意図的な」行為は明らかに以前とは違う行動様式ですから、蔡先生がレジュメ1ページの冒頭で指摘されているような中国認識が当時の日本には存在していたこととなります。そうなってくると、日本のアジア認識がこの裏側でどのように変化していたのが問題となってきます。

さきほど申し上げましたように、当時の日本は朝貢体制から外れていましたが、江戸時代の日本人は中国のマテオリッチの地図を介して世界を認識していました。この場合のアジアは、中国を一旦経由したアジア観に裏打ちされていますので、中華思想のなかのアジアということになります。しかし、仮に蔡先生がおっしゃるような文脈で日本が中国に対して別の新しいものを発信していたとするならば、その背後には中華思想から逸脱した日本独自の新しいアジア観、ないしは東アジア観が反映されていた、ということになります。この点について、もし何かご存知でしたらご教示ください。

この類の質問は歴史学の学会では盛んに論じられるところですが、蔡先生は歴史をご専門とされていないので、もしかしたらこういう質問は失礼だったかもしれません。ですから、あくまでも史料を通じてお感じになっている範囲内で簡潔にお答えくだされば、と思います。

続きまして鳥井先生への質問です。

アジアという概念はマテオリッチを通じて中国に入り、それが日本にも来たわけですが、アジアという概念が成立するためには、その前提としてアジアの向こうに広がっているヨーロッパというものがなければなりません。ヨーロッパがあるからこそ、それ以外の地域がアジアならアジアとしてはじめて認識されます。アジアをどうみるのかを考える際に、やはりその奥に広がっているヨーロッパを日本人がどう認識していたのが重要になってくるように思います。

鳥井先生は「小中華から半開へ」というタイトルを付された上で、レジュメ2ページで渡辺崋山や福沢諭吉の話を紹介していらっしゃいます。これに、今日ご紹介くださった当時の日本の東南アジア観を加えていくと、当時の日本が中国中心の世界観から近代西洋中心のそれへと移行しつつあった、とも理解できます。もしそうであるならば、その背後では日本のヨーロッパ認識に変化があった、ということになります。当時の日本人ないしは蘭学者のアジア認識の裏に潜んでいたヨーロッパ認識はどう変化していったのでしょうか。この点についてお教えてください。

最後に、お二人に共通してうかがいたいことがあります。

近年、日本史研究者のみならず中国史研究者も、江戸時代の日本は本当に鎖国だったのか、と疑問を呈するようになりました。清の時代は、1757年にヨーロッパとの窓口を広州一港に限定しましたので、一般論としては鎖国状態になったと言われています。しかし、中国の場合は広州一港に限定する以前に、アモイ（廈門）、ニンポー（寧波）、上海といった都市が既に国際都市として開かれていました。また、朝貢体制から離脱した日本とも長崎を通じて貿易をしていました。そして、鳥井先生がご指摘されたように「中国⇔福州⇔琉球⇔日本ないし東南アジア」というルートもありました。したがって、実質的に中国は鎖国状態ではなかった、とも言えそうです。

他方、日本はどうだったかと考えてみると、日本も長崎や琉球を介して中国とつながっていて、その中国にヨーロッパの情報が伝わって日本にもたらされました。あるいは、東南アジアには華僑・華人というネットワークがあり、例えばですが、中国の情報がインドネシアへともたらされ、それがオランダを介して日本に来る場合もあったように考えられます。そうすると、中国と同様に、当時の日本も世界とつながっていた、ということになります。

少し大きな話になったかもしれませんが、この点について鳥井先生と蔡先生はどのようにお考えでしょうか。もしよければご意見をお聞かせください。

私のコメントは以上です。

松田 御紹介いただきました松田です。人文学部日本文化学科に所属しています。私の専門は基本的には近現代の日本史です。その中でも特に植民地統治の問題を、具体的には台湾に即した形で現在は考えていますが、その関連で日本国内の帝国意識の問

題にも強い関心を持ちながら研究を続けています。今回のコメントも、その観点からしかお話を切り出すことができないことを、最初に報告いただいた先生方にお詫びしておきたいと思います。

さて、お二人の御報告は非常に興味深く聴かせていただきました。以前から御論文も読ませていただいていたのですが、御報告をお聴きしてさらに知識が深まった部分も多々あり、まだ完全には消化できていないため、認識不足の点もあると思いますが、ぜひいろいろお教えいただければと思います。

まず、お二人に共通する前提として、私の問題意識にも関連させて考えていくと、いわゆる「認識」という問題、特にアジア認識という問題は極めて政治的な問題だと思われまます。それは決して現在だけの問題ではなく、少なくとも近代以降、日本国内のアジア認識は、単なる知識の問題だけでなく、政治的、経済的な力関係の中で、それらと大きな関連性を持ちながら存在した問題として考えるべきだろうと思っています。

その意味で、近代以降の日本とアジアとの具体的な関係性のあり方と、日本国内のアジア認識が、どのように関連していくのかという問題は、実は私はむしろ近世にあったアジア認識とは、少し切り離して考えたほうがいいのではないかと考えているところもあります。しかし、近世から近代への移行といっても、その時代を生きた人々は、生活を継続して行っていたのであり、さらに知識は蓄積されていくものなので、ある意味で、近世との関連性をどのような形で考えるのかという点は、むしろ私を含めた近代史を専門とする研究者の方が熟考すべきことなのだと思います。

その上で、今回お話を伺って、やはり根本的な問題に立ち返って、考えさせられる点が多かったです。まず、近世の中でも一つの転換点があるのではないかとということをお二人の御報告から、改めて考えさせられました。蔡先生は冒頭で言及され、鳥井先生は最後の蘭学者の自他認識のところで触れられたことですが、18世紀後半にいわゆる中国の相対化というものが日本の知識人の中で起こってくるという問題です。それは、蘭学者の場合は「中華」の否定という問題であるでしょうし、蔡先生の御報告に即して言えば、いわゆる国学の勃興という形で、中国を相対化させて、日本の古典の中から日本の独自性を読み出してくるような考えが、例えば本居宣長の思想というような形で展開されてくる。このような現象は、蘭学、国学と切り離して考えられるべきではなく、むしろ18世紀後半の日本の「言説空間の転換」の問題としてとらえることが必要なのだろうと、お二人の御報告をお聴きして、改めて考えました。その上で、その「転換」の意味をどのような形で考えていくかという点について、御意見を伺えればと思います。

その上で、少し具体的なコメントをさせていただきます。まず蔡先生の御報告に対するコメントです。先ほどの中村先生のコメントとも重なるのですが、19世紀前半

を中心とする日本から中国への漢籍の環流の問題や、日本の漢籍が中国に非常に意欲的な形で紹介されていくような動向をどう考えるのかという点についてです。先ほど、私は、18世紀後半の日本国内の言説空間の問題として、中国の相対化が進んでいくということを述べました。つまり、中国の相対化は、蘭学や国学といった様々な「知」の個別の変容としてのみ起こったわけではなく、認識のあり方全体にかかわる「転換」として起こった事態としてとらえるべきだと指摘しましたが、蔡先生が報告された19世紀前半の漢籍をめぐる状況は、恐らくそのような枠組みだけで考えることはできない方向性も示しているのだと思います。一方では、18世紀後半に起こる「言説空間の転換」がありながらも、他方で、日本の漢籍を中国の知識人に一生懸命紹介していこうとする動きからみえるのは、絶対的な評価基準としての残り続ける「中国」だと思います。ここでは漢文学の状況として御報告されたわけですが、恐らく絶対的な基準としての「中国」は、漢文学の世界だけに留まらず、残り続けていく側面があるのではないかということ、蔡先生の御報告から考えさせられました。このような点は、どうお考えになるか、お聞かせください。

次に鳥井先生の御報告に対するコメントです。18世紀後半以降、日本国内で培われていくアジア認識について、具体的に資料を挙げて説明していただいたものの中で、特にジャワの人たちやスマトラの人たちに対する表象のあり方は、実際に近代期の日本の人類学者の発言のあり方と酷似しており、その意味では、近世から近代にかけての強い連関性を感じさせられます。

ただもう一方では、当時の蘭学者のアジア認識のあり方は、彼らが依拠して西洋書に示された認識のあり方、そこに含まれている人種観に、大きく規定されていたのではないかと思います。今回資料を挙げて御説明いただいた、現在では東南アジアと呼ばれる地域について、例えば中国史がご専門の坂元ひろ子さんは、19世紀以降の中国知識人のアジア認識に即して、東南アジアの人々に対する認識は、西洋の当時の人種観を反映させながらも、リアリティを持つ「他者」として語られていく側面があると指摘されています（坂元ひろ子「中国史上の人種概念をめぐる」『人種概念の普遍性を問う』、竹沢泰子編、人文書院、2005年）。つまり現実的な利害が絡む問題として、「華人」の東南アジアへの移民という問題があって、それとの関係で、言ってみれば、アフリカの人々といっても、具体的な「他者」として、リアリティを持って考えることは難しかったが、東南アジアの人々については、自分たちと利害関係があるリアリティのある「他者」として考えられていく側面が、19世紀以降あるのだという議論を展開されていて、とても興味を惹かれました。この中国知識人の例にみられるような、西洋の書物で示された知識に対する何らかの付け加えや読み替え、プラスアルファの部分というのは、日本の蘭学者のアジア認識の中では、どのような形であったのかということ、お聞きしたいと思います。

私見ですが、近世後期の日本社会の中で、リアリティを持つ「他者」というものの可能性があるとするれば、むしろ「蝦夷」の問題ではないかと思っています。アイヌの人々に対する認識については、どのような形で蘭学者の他者認識、もしくはアジア認識の問題として考えることができるのか、お考えをお聞かせいただければと思います。私個人としては、近世から近代へ、もしくは近代のいわゆる政治的な権力関係と非常に関連しながら深更していくアジア認識の問題は、ある種のリアリティや、具体性という点を基軸として考えるべきではないかと思っている部分もあり、それとの関連でこのような質問をさせていただきました。

私のコメントのまとめとしては、先ほど中村先生が述べられたこととも関連しますが、近代以降も、日本社会の中で、「中華」の存在は、決して早く消えるものではないだろうと思っています。一方では、西洋との「距離」という問題がありながら、中国との「距離」をどのように考えるかということは、特に1900年前後から1910年ぐらいまでは、とても大きな問題だったのではないかと考えています。例えば、19世紀末に台湾の植民地支配を始める段階でも、中華文明の影響を受けている「場」が台湾であって、そこに支配者として下り立つということに対する緊張感を、日本の植民地官僚たちはかなり強く抱いています。西洋からの知識の輸入という問題と、中国との「距離」という問題は、近世だけの問題ではなく、19~20世紀にかけての日本の知識人のあり方、もしくは「知」のあり方を考える上で、非常に大きな問題としてあるのだという点を、お二人の御報告から改めて考えさせていただきました。以上で、コメントを終わります。

鳥井 コメントをありがとうございました。短い時間ではとてもお答えできないようなことばかりでしたが、順番に中村先生から。アジアをどう見るかというのはヨーロッパをどう見るかということと関わりがあると。

当然そうなのですが、簡単にいうと、ヨーロッパという存在を知っても、例えば蘭学が興る18世紀半ば以降、蘭学者の場合はまず学術の面でヨーロッパ優位ということを実際にも実験などをして認識していく。天文学、本草学、そして医学、そのほかの自然科学と。その一方、庶民の間ではオランダ人を畜生視するような意識も強かったので、レジュメにもありましたが、大槻玄沢という蘭学の大成者のような人が、『蘭説弁惑』という一般向きの本を18世紀の終わりに書いています。漢文ではなく仮名交じりで、「皆そのようなことを言うけれど、オランダ人も私たちと同じ人間だ。変な動物じゃない」と。わざわざ世の「惑いを弁ずる」必要があったわけです。

『解体新書』や18世紀の後半に至るまでのヨーロッパ認識は、蘭学者の場合でも個別の知識が増えるということと、まだ現実の脅威はありませんから、知的好奇心の対象で、面白い、珍しいといろんなものを喜ぶところがあって、庶民も美術や工芸の中

にオランダ模様というか、「オランダ」をモチーフにする。

それが、18世紀の終わりにはロシアの外圧、19世紀に入れば、イギリスの接近もあり、主たる関心が軍事力や植民地支配に移る。アジアの国々が次々に植民地にされて、日本も明日そうなるかもしれないという非常な危機感を持って、ヨーロッパの研究をするようになる中で、ヨーロッパに支配される存在としてのアジアというパターンができてしまう。

さらに幕末になると、学術面でのヨーロッパ観と実際の政治・外交面でのヨーロッパ観は少し違うところがあるし、庶民レベルはまた違うのですが、知識人のレベルでいうと、国際環境の変化による時代の課題、日本はどうすべきかという切実な要求が学問に反映されます。

それから、江戸時代は本当に鎖国だったかというのも古くて新しい議論で、20年ほど前ですか、「四つの口」といって、四つの口を介してヨーロッパだけではなく様々な所に開かれていたとする見解、これはほぼ常識化しつつあると思います。

中村 「4つの口」というのは、松前、対馬、琉球、長崎ですか。

鳥井 松前・対馬・長崎と薩摩口です。ただ、それをもって完全に日本は世界に開かれていたというような議論は……。実は明治以降、「鎖国」という言葉に日本人がとらわれ過ぎていて、一定のイメージを持ってしまっている。歴史的な実態とは違う、長年にわたって教科書などで刷り込まれた、鎖国ということで江戸時代を見過ぎている。それでともすると「鎖国はなかった」という乱暴な議論に行く。人間の入国は厳しく管理されていたし、出国も難しい。物は大変な量が世界各地から入ってきて、日本からも出ていく。しかし、そこにもやはり制限がありましたから、管理統制がなかったということはない。どこまで何がどれほど閉じられ、どれほど開いていたのか。それを厳密に見ていく必要がある。例えば、情報の面ではどうか、物は、お金の流れは、人はどうか。「鎖国」という言葉のイメージにとらわれ過ぎているところはちょっと解きほぐしたほうがいいと思います。

中村 自己批判になるかもしれませんが、そうすると『『鎖国』を越えた知識人』というタイトルはあまりよくなかったでしょうか。

鳥井 鎖国に括弧を付けているからかまわないのではないのでしょうか。

18世紀後半が転換点ということですが、確かに18世紀後半、外圧が厳しくなり、内憂外患の中で、日本人は「日本のアイデンティティ」を初めて真剣に考えるようになった。蘭学も国学もその点似たようなものです。蘭学は単なる輸入学問のように思

われているかもしれませんが、実は日本の学問です。

かつては長い間、日本の近代化=西洋化とし、西洋化の度合を尺度として蘭学者を評価していました。例えば医学では、西洋医学一辺倒を近代の先駆者とする見方で、漢蘭折衷の立場をとった蘭方医を中途半端で遅れていると低く評価してきました。その認識の枠組みが出来たのは、日清戦争前後です。福沢諭吉を中心として、近代化=西洋文明化で、その先駆はどこにあるか、それは前野良沢だ、『解体新書』だと。そして蘭学（蘭学者）の系統図が出来上がり、それが無批判に継承されてきた。蘭学とは何か、そして蘭学者の評価、その根本の枠組みが特定の時代の特定の条件の下に作られたということ、もう一度考え直さないといけない。それにしても、18世紀の後半は大きな一つの転換の時期ではないか。実は、オランダ通詞のオランダ語能力も、ロシア情報の翻訳に迫られて、この時期一挙に向上するのです。

東南アジアに関して当時の蘭学者が知識を提供しますが、蘭書を訳したときに何か付け加えた部分があるかというご質問だったと思います。当時の日本は、幕藩体制が揺らぎ、財政も破綻していました。ロシアが来た時、通商要求は拒否しましたが、日本の生きる道は国を開いてほかの国と貿易する以外にないと考えた知識人は、幾人かいます。日本は、外国貿易で金も銀も銅も流出してしまったので資源がない。蘭学者のうち帆足万里（日出藩家老、「窮理通」の著者）などは、ミンダナオとか、それこそ南洋には素晴らしい資源がある、そこを占拠すれば日本も何とかなるだろうと著書の中で言っています。

蔡 お二人の先生、コメントをありがとうございました。私は日本語が不自由ですので、簡潔、簡単に答えさせていただきます。中村先生の御質問と松田先生の御質問は共通しているものが多いですから、まとめてお答えします。

近世日本の中国に対する認識は中華思想の枠内で、そんなに超えていないと思います。基本的な判断の基準は中国。ただし、日本の独自色をどうしても出したいという動きは確かにありました。私のさきほどの発表では、日本の発信しようという意欲は強かったと強調し過ぎたかもしれません。例えば、中国の権威はそんなに低下していません。以前が100だったら90ぐらいの低下です。

ただし、この10%は非常に重要です。つまり、まとめて言うのは非常に便利ですから、研究者はばーんと言ってしまうおと。実は、歴史というのはいろいろ側面があって非常に複雑です。例えば、松田先生がおっしゃった18世紀の後半からの転換点ですが、ほかの歴史はあまり詳しくありませんが、漢文学からいうと、漢詩の日本化もその時期からです。それ以前、日本では荻生徂徠の有名な批判、日本には「和習」があって、日本人が書いた漢文や漢詩は動詞を後に置いてしまうとか、どうも日本人っぽい。私はいま日本のおじいさんたちの漢詩を指導していますが、ときどき、

君たち、和習ですよ、と。しかし、18世紀後半からわざわざ和習をとり入れて、日本人の漢詩ですからどうしていけないのと。例えば、以前は名詞も日本の地名や人名も禁止でしたが、それを付けるようになりました。代表者は頼山陽です。

頼山陽の、さきほど紹介した『日本楽府』の後書きに、面白いたとえがありました。あなたはなぜこういう詩を書いたのか。日本という国はそんなに素晴らしいですかという質問に対して、頼山陽の答えは、隣の中華は素晴らしいですよ。それは認めます。否認はしません。そっちの梅はきれいに咲いていますが、冬に咲いているロウバイは小さいけれど、でもそれなりの値打ちがあるじゃないか。だから、私はロウバイを咲かせましたと。彼の友人たちがそれを中国へ送って、中国人の評価をもらおうと。そういう歴史でした。

要は、歴史の研究の場合は、時期の分け方、どこが主流か、見方によって違う。歴史は複雑なものです。しかし、私の理解は非常に素朴なんです。徐々に増えていく。18世紀後半から日本の独自性を出そうという動きがだんだん強くなり、明治維新とのつながりもありました。実際大きな転換点は日清戦争です。私の知り合いで、中村先生も御存じの東大の齋藤希史さんが最近『漢文脈の近代』という非常に評判のいい本を出しました。少なくとも明治前半は、漢文は重要だった。でも、漢文脈の近代ですと、中国のまねばかりの漢文じゃなくて、日本的な漢文。

中村先生から何か資料を紹介できるかという御質問がありました。著者の名前は忘れましたが『漢学論』というものです。それは明治初期です。その発言の中心は、「我々の漢学は中国の漢学ではない。日本の漢学だ」と。例えば、友人の齋藤希史さんが書いた『漢文脈の近代』の中の一つの指摘は、日本人の漢文は訓読で書いた漢文だと。だから、本場中国の漢文と違うのは当たり前なんです。そのような考え方がいろいろあります。ですから、漢文学の世界においては中国に対する尊敬は基本的には変わっていない。でも、なるべく日本的な特色を出そうという動きは18世紀後半から明治維新前半までです。大きな転換点は、日清戦争で中国が負けたことで、それから中国は大したものじゃないと急転換。これが私の基本的な認識です。